Nec possum tecum vivere,
Nec sine te.
R-18

望まれる事項(こと)に応えられなければ、必要とされないの

そう言った私に
彼は困ったような顔をして
少し、笑った

ねぇ

『アレスは私に何を望むの？』

『――私は』

『　モモメノ様、貴女が――――　』

彼の返答に、彼の望むことに
私は応えられなくて

だから、きっと
離れてしまった

彼が求めたのは
至極、簡単なこと

なのに

私は今も、それが出来ずに居る――

Preface

❖ 初めまして。こんにちはの方もいらっしゃるでしょうか？たかしな浅妃と申します。
お手にとって頂き有り難う御座います。

❖ ななどら本もなんだかんだ言いつつ五冊目と相成りました。
今回の本は４月頃に発行したセイブザクイーンの流れを汲んだ話となってます。
既読ではなくても大丈夫なように下記に人物紹介と粗筋を用意してみました。
多分、読まなくても大丈夫だと思うのですが、興味のある方はご一読くださいませ。

❖ 拙い本ですが、最後までお楽しみ頂ければ嬉しいです。

モモメノ

聖声特化のプリンセス。
過去にカザン奪還を試みたギルドの生き残り。
グリオンに勧誘されて、ギルドに加入。

グリオン

防御特化＋セイブザクイーン持ちナイト。
モモメノをギルドに勧誘した。
主従関係以上の感情をモモメノに持っている。

カザンを帝竜から奪取し、英雄となったとあるギルド。
そのギルドに所属しているグリオンは戦力不足を埋めようと、ギルドオフィスに足を向けていた。
そこで一人、寂しそうしているモモメノが目に留まる。
ギルド管理長のエランから、彼女は貴方達以前に帝竜討伐に向かったが壊滅させられたギルドの生き残りだと聞かされる。
帰ってくるのか判らぬ仲間を待つモモメノを、グリオンは自分のギルドに所属させたい希望し、他のメンバーを説得した。
ギルドに加入させる前に、まずは警戒心を解こうと何度か接触を図るうちにモモメノがグリオンに問う。
「どうして私に構うの？」と。
前ギルドに組んでいたナイトが居た為、同じ職であるグリオンに会う度に仲間のことを思い出し、モモメノは辛いという。
そんな彼女に笑っていて欲しいから。と返すグリオン。
その言葉に泣き出したモモメノを慰める内、なし崩し的に彼女を抱いてしまう。
そんなモモメノがグリオンに出した命令は『傍にいて。一人にしないで』
画してモモメノはギルドに加入することになった。
前ギルドの仲間が帰還するまで、という条件付きで。

…め

ひ…め

姫!!

はっ

——…あ

大丈夫、ですか…？
返事がなかったもので

へい…き

夢…？
前ギルドと離れた時の…

少しぼーっとしただけ

レオ
これ以上の強行軍は危険かと

確かに…これから先
真竜と闘うなら
万全の体勢で
望むべきだわ

そうだな
一度ミロスに戻るか

戦略的撤退ってやつだな

——いつか聞いたのと同じ科白

やめて

これじゃあの時と…
前ギルドとはぐれた時と
全く一緒――

平気!!

しかし
貴女が疲弊しているのは
傍目から見ても明らかです
ですから――

グリオン

心配、してくれてるん…だよね

けど、これは命令(オーダー)

へいきだから
さきに進もう?

――っ

判り…ました
しかしご無理は
なさらぬよう…

本当に大丈夫なの？
うん ありがとう…
怖いの――
ほっ…
この状況も、今のやり取りも まるであの日の再現のよう
もし…あの日と同じ選択をしたら、今のギルドとも離れてしまいそうで
だから――
ぼんっ
ぼっ
ぼっ
モモメノ
ちょっと先の様子見てくるから お前は少し休んでろ

足手まといなのは判ってる
自分が限界なのも
ぐっ
皆に迷惑かけて、我が侭言って
こんなの杞憂に決まってるのに
ばかみたい…
…あ…
ぶっ…
――影…？
いくんっ
しまった――

――っ！
間にあわない――！
あ…
――結局
私がどうしたところで
運命なんて変えられなくて
全部あの日と一緒

姫!!
ご命令(オーダー)を!!
怖くて
っ…
声が出ない
はあっ…
あの時と同じように
何も出来ずに失うの?
またくりかえすの?
そんなの

そんなの、もう二度と――
命令（オーダー）!!
我が刃となりて
彼の敵を
打ち滅ぼしなさいっ
――仰せのままにっ

——姫っ
ご無事ですか？

はぁっ

お怪我は…っ

ひ…め？

——ご…めん
…なさい…っ——

私がっ…グリオンの
言うとおりにしてれば
こんな怪我しなかった…

またっ…いなく、なっちゃのかと
おもって…なにも、できなくて
ごめん、なさい…っ

きゅうっ

——姫

私は大丈夫です

大丈夫ですから――
姫が不安定になることは以前から時折あったけれど
あれだけ顕著な反応は久々に見た
またいなくなっちゃうのかと
また…か
おそらくは前ギルドに関係ある何かを思い出したのだろう
結局、今までその話題には触れず仕舞いだったけれど
いや

聞きたくないんだ

その話題に触れることで

共に居られる時間が有限なのだと
思い知らされるのが――

――姫…？

見間違い…じゃない

こんな夜更けに何処へ――？

きゅっ

姫
あ…
夜は冷えます
戻りませんか
…もう少し
ここにいたい
判りました
ですが、夜にお一人では
危険です
お隣、宜しいですか？
…うん
ね…
グリオンはどこで
生まれたの…？
さあ——
何処だったのか…

…？

私の記憶の一番初めは

アイゼンで奴隷として働いている…そこからです

それより前のことはもう――

…そう…

私は――ね

ミロス(ここ)で生まれたの

この屋敷で――

ミロスの貴族が
愛人に生ませた娘

それが私

物心ついた時には
母はすでに亡くなっていて
傍に居たのは

ミロスの平等主義を
善しとしない
野心家の父と

モモメノ様

アレス

歌姫だったという
母に仕えていた騎士

屋敷の中がすべての
狭い世界
けどアレスが外のことを
たくさん教えてくれて

いつか私も歌姫になって
世界を巡ってみたいと
そう思ってた

だけど——

こんな簡単な歌も歌えないのかっ！
こんなことでは女王はおろか女王候補（プリンセス）になることも叶わんぞ
ごめ…なさっ…い
父は私をマレアイアの女王にする事に固執していて
歌うことだけを私に望んだ
次までに何とかしておけ
そんなことありません
アレス…モモじゃお姫さまになれない…？
モモメノ様もお母様のような素敵な歌姫になられます
もう泣き止んでください お好きな歌を歌えば嫌なことも忘れられますから
…うん
歌うことは好きだったし幼い頃はそれが当然だったから何も思わなかった
だけど成長するにつれ疑問が降り積もって
私はどうして歌うの…？

ばさっ
また女王候補から外れたか
……
——お父様
私…女王候補になる為だけに歌うのは…もう
そんな戯言をいう暇があれば少しでも歌を磨け
だけどっ
何度もいうように私…っ
煩いっ!!
ぽたっ
——あ…
お前のような出来の悪い娘を持った覚えはない

何処へなりと行けばいい

旦那様！これではモモメノ様があまりにも…っ

アレス

もういい

もういいから

結局

望まれる事項に応えられなければ必要とされない。それだけのこと。

屋敷を出た私にアレスは着いてきてくれた

でも

彼も私が歌姫になることを望んでたんじゃなかった――？

応えなきゃ

ぎゅっ

応えなきゃきっとアレスも離れてしまう

彼の望む歌姫で居なきゃ

そのうちギルドの皆と知り合って

仲間に必要とされるのは嬉しかった

でも時々、望まれてることに応えられてるのか不安で

だから一度だけ聞いてみたの

アレスは私に何を望むの？

彼は…なんて答えたんですか？

私がおもってたのと全くちがうこと

私、アレスのこと何も判ってなかった…

だから…離れてしまったのもしかたなかった…のかも…

それは――

ね…グリオンは私に何を望むの？

こういう、こと――？
――…っ
なに…を
グリオンが望むなら
私できるよ
違います…っ
私は姫に
このようなこと――
どうして…？
前に言ったよね
私のことグリオンのものにしたいって…

それってこういうこと…だよね

私…ちゃんと、できる…から

違う

こんな表情させたかった訳じゃない

こんなことさせたい訳じゃ

姫っ…落ち着いて私の話を――

じっと…してて

はぁ…

――っ…

…グリオンのさわるの…はじめて

すりっ

いやっ。

すごく、あつくて…

っ…！
いけません…っ！

こう、すると…
いいんだよ、ね…？

ん…っ
…っふ

このまま流されたら
誤解されたままになると
頭では判っているのに

目が離せない――

びくびく…してる
きもち、いい…の？

なんだか
ぬるぬるしたの…出て

あの…ね
私…ちっちゃい、けど…

こう…か、な

っ…もういいですから

ちる。

ちゅ♥

姫…それ以上は！

ふにっ

やばい――

くっ…すみません
出ます…う！

んっ…！

んっ…う…

っ…あ

はっ♥

はっ♥

はあっ♥

申し訳ありませんっ
大丈夫、ですか…

こほっ…

いっぱいどろどろしたの
はいって、きて…

……のんじゃっ、た…

はーっ♥

はーっ♥

これ…グリオンの…？

んぅ…にが、い…
あ…！すみません
口の中で…お嫌でしたよね…
はぁ。
ぬるっ？
——ううん
グリオンの…だから
いやじゃ、ない…
ちゅぷ。
姫…本当にもう
充分ですから——
…？
どう、して…？
えっ、と…だって
いつもは、こっちも…するよ？
——っ…！
ここに…これ
いれる…んだよ、ね
ちゃんと、できる…から
くちゅ

ぬるっ
ぬるっ
んっ…はっ…あ
はいんな…っ
っ…！
——っあ
はいっ…た…？

姫の準備が出来てないから
千切られそうなくらいに
キツい…っ

姫にこんな無茶をさせてるのは
自分の不用意なあの一言

う…い、た…っ
っ…痛いなら
ご無理をなさらず——
い、や…

私は、いいからっ…
グリオンのしたいこと、して…

けれど彼女がここまでして
自分に固執してくれることが
——嬉しい

——姫……
貴女に痛い思いを
させてまで
したいことなんてありません

あ…
抜くのも痛い…ですよね？
少し慣らしましょう
あ…っ
だ、め…そこ
さわっちゃ…
ふあっ…あっ
やっ…やぁ、あ
いじっちゃ…だめ…っ
気持ちいいみたいですね
少しですけれど
濡れてきてますし…
はぁ…っう
だっ、て…よわいとこ
さわる…っ
そうしないと姫が
痛いままですから
ちょっとだけ
我慢して下さい
っあ
ひぅっ
みみ…だめっ
やだぁ…っ

でしたら、こちらを…
ちゅっ
はぁっ
つあ…んそれも…っ
…ひあっかんじゃ…
しっぽも弱いですよね
さわっ
きゅんっ
きゅっ
！
やっ…やああっしっぽ、やだぁ…っ
姫の膣内大分濡れてきましたよ気持ちいいですか？
——う、んっ
きもち、いい…っ
はっ
はっ
きもち、よく…てへんにっ…なっちゃう…っ
そのままイってもいいですよ
で、も…っ私だけ…じゃや…っ、そこじんじんして——っ
姫…締め付け強くなってますよ
きゅっ
もう限界ですね
あっ…！

きゅうう♡
やっ…
ぶるるっ
っ――あっ
あっ
あっ
ぴくっ
はぁ――っ
ぴくんっ
っ――はぁ…
はぁ――っ
はぁ――っ
ぱたっ
はっ…
ごめん、なさ…い
…わたし
よごし、ちゃっ…た
あう…
大丈夫ですよ
姫…多分もう
抜いても痛くないと
思います
だめ
まだグリオン
たりない…よ、ね？
ぎゅう
はぁ…っ
ぷしゃっ

ちゃんとさいごまで、して
——判りました
はっ♡
んっ…♡
はぁっ…♡
はっ
姫…痛くないですか？
ずぶ…っ
んっ…へいき…だけ、ど
このかっこ…グリオンの
はいってくるの
みえ、て…はずかしい
ぎゅっ
さわさわ
っ…姫の膣内
全部挿りましたよ
きゅっ♡
きゅっ♡
ぐちゅっ
うん…わかる
おなか…あつくて
動きますね

ここ、お好きですか？
突くと物凄く締め付けてきて

つふあ…やっ
奥…よわいとこ
いっぱいっ
いっぱい…突かれ、て…っ

やっ…やあ、だめ
でちゃ…でちゃう

やあっ…あ――っ
あっ あ…っ

姫…っ
声、抑えて下さい
誰かに見られて
しまうかも――

!!

…っは…ん、んっ

そうです
姫はいい子ですね

さっきよりきつく…
姫は…恥ずかしいと思うと
反応が良くなりますね

そん、な…ことない…っ

そう…ですか？今も膣内がひくひくして…っ

そんなにされると我慢が…少しだけ激しくしますから

くちゅ

ひくひく

きゅん

くちゅっ

——っ

ふ…やっ…やぁぁイく…っ

わた、し——っイっちゃ、う…

姫——っ私も…っ

射精します…っ姫の…膣内に——っ

っ…あ——っ

あ——っ

ぶしゅっ

ぶしゅっ

やぁ…おなかで、あつ…いのいっぱいっ…！

いっぱい、でてるよぉ…

ひくっ
ひくんっ
どろぉ…
――っは…
いっぱい…でて
すみません
無茶をさせてしまって…
…いいの
ね…私、ちゃんと
グリオンの望むことできた――？
はあっ…
はい…
こんなこと
そう…よかった
望んでないと言った嘘になる
けれど、本当に彼女に望んでいるのは――
お身体…大丈夫ですか？
う…ん、だいじょう…ぶ

っ…

お連れします

もう無理はなさらないで下さい

う…ん

姫…こんなことを言っても信じて頂けないかも知れませんが

貴女に一番、望んでいることは初めに言った時から変わっていませんよ

な…に？

貴女が笑ってくださること

それだけです

――っ
そう…ですか
…おなじこと
アレスも言ってた…
本当に望まれているのはささやかなことなのに
私はいつになったらそれに応えられるんだろう――？

Afterword

後書きです。というか内容の補足ページになってしまいました。
普段は、完成した物は読んでくださる方に好きに解釈して頂ければ。と思って語らないようにしているのですが、
今回の本はちょっと補足させて頂きたく思います。
宜しければお付き合い下さい。

今回の目標はモモメノの過去話本。
これの前段階の話になる本を作っていた時には、続きの話を描くかどうか怪しいな。と感じていたので、
あまり先のことを考えずに描きたいように描いたのですが、それが今になって仇になりました。何となく予想はしていたのですが…。
も一つの目標はモモメノに攻めさせたいというのがあったのですが、失敗してる気がします(゜・ω・)
序盤しかイニシアチブ握れてませんね。
グリオンの方は意思薄弱っぷりが浮き彫りになってますが、
まあナイトと言えども健全な成人男性なんであんなもんかと思ってやって下さい（笑）

本文中設定の補足です。
モモメノの設定ですが、資料集を見てもミロスに貴族階級が居ないとは何処にも書いていなかったのであのような設定にしました。
騎士階級がいるなら貴族階級もいるはず。王制だしな！
ミロスの徹底した平等思想は、ゲーム中いい感じに薄ら寒かったです。
上昇志向の人とか野心家の人には、さぞ居心地の悪い国だろうなあ。等と考えて出来たのがモモメノの父親です。

マレアイアの女王選出方法も本編では不明瞭でしたが、実力主義のようなので出自は多分関係ないのでしょうね。
だったら、自分の娘を女王に！と思う人が居ても不思議はないかな、と。
女だけの国とは云えども、嵩っても一国の主。女王の血族にもそれなりの権力と威光が得られる…はず？
そんな理由で、父親はモモメノをプリンセスにしたかった、と。
本文中でもっとそこを掘り下げたかったのですが、
只でさえぶれてる主軸をこれ以上ぶれさせてはならぬ！という判断から切りました……。

最後までお付き合い頂き有り難う御座いました。
もし感想等御座いましたら、メールや拍手などでお教え頂ければ嬉しいです。
それでは　廻わぐばまたいつかお会い出来ることを祈って。

2009,Winter　たかしな浅妃　拝

姫の語った騎士(かれ)に、自分を見てしまう

きっと、多分…彼も

自分の姫のことが――

所詮望んでも叶わぬ想いなのだと、そう言われた気がした

けれど――それでも構わない

彼女が自分の存在を望むなら、それに応え続けよう

Nec possum tecum vivere, Nec sine te.

私は貴女と共には生きていけない。けれど貴女なしでは生きられない。

Date of issue：2009/12/31
Produced by：JYUNGINBOSHI
Publisher：Asahi Takashina
Print office：Kanazawa Printing

2ndsilver@gmail.com
http://7th.x0.to/~slv/

成人向けにつき、未成年者の購読・閲覧・所持を禁じます

7THDRAGON FANBOOKS*05
2 0 0 9 1 2 3 1
Asahi Takashina Presents
[J Y U N G I N B O S H I]